

都道府県名	奈良県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	広陵町立広陵中学校					
学 年	1 年	2 年	3 年	障害児学級	計	教員数
学級数	6	5	5	1	17	30
生徒数	205	193	176	2	576	

研究の概要

1. 研究主題

生徒一人一人の実態に応じた学習指導の在り方についての研究
 - きめ細かな指導の充実を通して、生徒の主体的な学習意欲を喚起させ、個性の伸長を図るとともに、基礎的・基本的な内容の定着を図る -

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

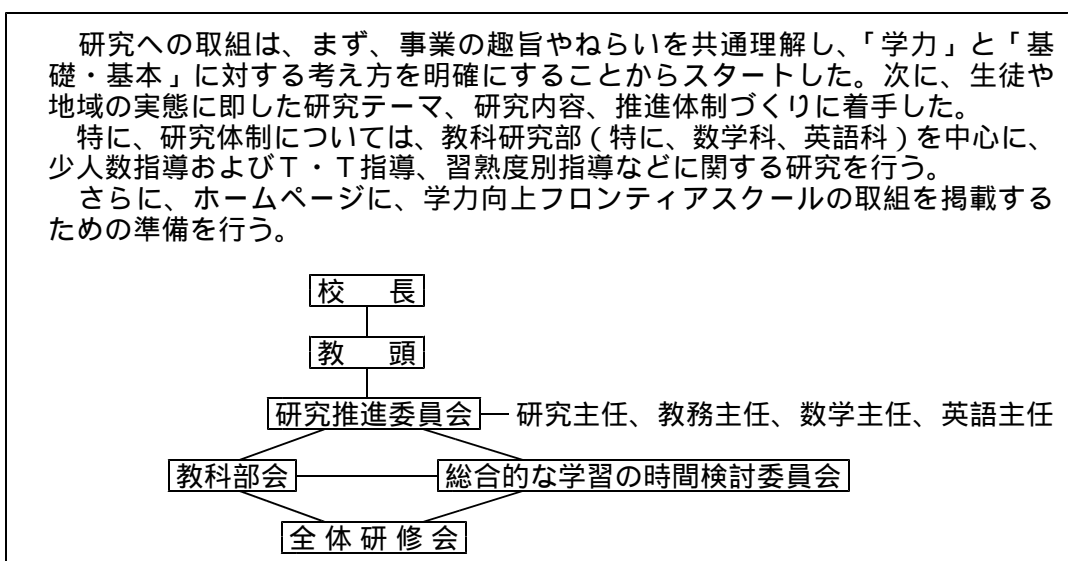
- ・ 2年生・数学
生徒の理解の状況に差が出やすい教科であるため。
- ・ 2年生・英語
生徒の理解の状況に差が出やすい教科であるため。
- ・ 3年生・数学
昨年度から少人数授業を実施し、2年生での研究成果と生徒に対する実態調査をしたところ、生徒の理解の状況に差が出やすい教科であるという結果が見られたため、実施学年の枠を広げ、研究に取り組んだ。

(2) 年次ごとの計画

平成 15 年 度	<p>テーマ 個に応じた指導のための指導体制・指導方法の工夫改善 研究の見通し 従前の指導形態や指導法を見直し、少人数指導を生かした効果的な指導の在り方について研究を進めることにより、基礎的・基本的内容を身に付けさせることができるのではないかと考えた。</p> <p>研究の内容・方法 等質のグループ編成の授業から、学習する単元の特性や生徒の実態に応じて、生徒の理解や習熟の程度に応じた授業への転換を図る。</p>
--------------------	---

平成 16 年 度	<p>テーマ 個に応じた指導のための指導体制・指導方法の工夫改善 研究の見通し 前年度の成果を継承しつつ、さらに個に応じた学習を推進することにより、分かる授業が展開できるのではないかと考える。</p> <p>研究の内容・方法 等質のグループ編成の授業から、生徒の理解や習熟の程度に応じた授業への転換を、より一層図る。</p>
--------------------	--

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

数学2年生について

1学期は、クラスを2分割し、等質少人数授業を実施した。1学期の期末テスト終了後、Xコース（基礎コース）、Yコース（応用コース）に分けて習熟度別指導を行った。

- ・ Xコース、Yコースの授業内容についてのガイダンスを行い、コースの選択は生徒が選択する方法をとった。
- ・ いずれかのコースでしばらく授業を受けてみた結果、自分には合わないと感じた生徒が判断した場合は、コースの変更ができるよう配慮した。
- ・ コースの変更について相談がある場合は、いつでも応じることができるよう工夫した。

成果としては、次のようなことが挙げられる。

- ・ 個々の生徒に目が行き届き、学習状況が把握しやすい。そのため、生徒が授業に対して集中しやすい。
- ・ 質問等の発言がしやすい状況なので、個々の生徒に合わせた指導ができる。
- ・ 生徒の実態調査（学力診断テスト、少人数指導、習熟度別学習に関する意識調査）〔別紙資料添付〕を実施、分析することで、今後の取組の課題を明らかにすることができた。

英語2年生について

今年度、2年英語の授業において、少人数授業を行った。はじめは、クラスを2分割し、等質少人数授業を実施した。2学期の中間テスト前からは、習熟度別授業を実施した。実施にあたっては、オリエンテーションを行い、実施の意義や目的について説明した。

成果としては次のようなことが挙げられる。

- ・ 生徒一人一人の様子がよくわかる。
- ・ 一つの作業をさせるときまとまった時間で終わることができる。
- ・ コンパクトにコミュニケーション活動を取り入れることができる。
- ・ 教科書のリーディングやペアワークなどの活動で、全員の声を聞くことができる。
- ・ ALTとの授業では、ALT対生徒個人のコミュニケーションの場面も多くもつことができた。
- ・ 「英語劇」の発表会を行うこともできた。
- ・ 生徒の実態調査（少人数指導、習熟度別学習に関する意識調査）〔別紙資料添付〕を実施、分析することで、今後の取組の課題を明らかにすることができた。

数学3年生について

各単元の学習は、クラスを2分割して等質少人数授業を実施した。単元学習後に行う演習問題については、クラスを習熟の程度によってX(基本)、Y(応用)の2つに分けて実施した。クラス分けについては、生徒が教師のアドバイスを参考にしながら自主的に選択した。

成果としては次のようなことが挙げられる。

- ・ 人数が多い中では質問できなかった生徒も、質問しやすい雰囲気ができ、学ぶ糸口を見出している様子がみられた。また、授業中に教師から質問される機会も増え、毎時間ほぼ全員が発表するなど、何らかの形で授業に参加し、学習意欲も喚起され、学力向上にも大きく結びついていると考えられる。
- ・ 今年度は、単元によって等質少人数授業と習熟の程度による学習形態も取り入れ、複合した形態で実施した。習熟度別学習では、得意な分野と不得意な分野でX、Yを自分自身で選択することで、学習意欲が高まった生徒も多く見られた。このように、生徒たちも少人数授業の利点を活用しようという雰囲気が育ってきたと思われる。
- ・ 17~18人という人数で、全体的にアットホームな雰囲気が生まれ、質問が活発になり、学習内容を確認する発言が増加した。
- ・ 早めに教室に集まり、あるいは、授業後に残って級友同士が気軽に教え合う姿勢が増加した。
- ・ 1対1の会話の中で知識を定着させていく様子が、下位群・中位群の生徒の層に増加した。
- ・ 発展的な課題への質問も増加した。
- ・ 生徒の実態調査(少人数指導、習熟度別学習に関する意識調査)[別紙資料添付]を実施、分析することで、今後の課題を明らかにすることができた。

2. 今後の課題

数学2年生について

- ・ 生徒の学習状況が把握しやすいので、生徒のつまづきを解消するための時間の保証をどのように行っていくかを考える必要がある。
- ・ コースの違いによる授業の進度のずれをなくし、生徒がコース移動しやすい状況を作らねばならない。
- ・ 教師による指導方法の違いを少なくするための方策を練っていく必要がある。
- ・ 時間割の組みにくさをどのように工夫すればよいか、検討が必要である。

英語2年生について

- ・ 緊張感が持続できる学習活動の工夫をしていかなければならない。
- ・ 等質少人数授業において、授業の中で学び合いができるようなグループ活動の工夫を行う必要がある。
- ・ 所属学年が異なる場合、教えるポイント、小テスト使用プリント等細かな打合せの時間確保の難しさがある。

数学3年生について

- ・ 使用する教室について、工夫が必要である。
- ・ 学級担任としては、学級全体を教科指導のなかで把握できない点がある。母集団自体を少人数制にすることも検討する必要がある。
- ・ 時間割変更の困難な時があった。
- ・ 習熟の程度によるクラス分けの人数が偏り、少人数指導のよさを生かし切れない状況を作らないために、工夫が必要である。

学力把握のための学校としての取組

- ・ 学力診断テストの実施。(2年)
- ・ 少人数指導・習熟度別学習に関する意識調査。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- ・町広報の学校紹介において、少人数授業についての取組を紹介。
- ・ホームページを作成し、本年度の取組の概要を掲載予定。
- ・平成16年度に学力向上フロンティアスクールとして、本校の研究発表会を開催する予定。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T.Tによる指導
 その他
- 【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無